

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」2月号 (通巻第21号)

2009年1月28日発行

【発行人】赤塚祐一郎

【編集人】大森美知子

【発行所】株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

http://www.radiodays.jp

2

February Edition

2009, vol.21

Free of charge

この人の声が聴きたい◎2月 木村政雄さん (ラジोधューサー)

木村政雄の講演は何故伝説になったのか



木村さんはいつお会いしてもきちつとネックタイを締め、品のよいジャケットを着ている。芸能界で名を成した方だが、ベンチャー企業の支援をしたり、中高年向けの雑誌を発行したりと多方面で活躍しており、一部の芸能関係者のような浮ついたところは微塵も感じさせない。

一度だけ、木村さんの講演を聴いたことがある。自分が企画したトークイベントにお呼びしたのである。それまでも、仕事では何度も顔を合わせていたし、木村さんの講演はその筋では伝説になっていたが、実際に至近で拝聴したのはこのときが初めてであった。

会場で挨拶をした時点で、いつもの柔和温顔の木村さんではなく、張りつめた気配を漂わせていた。私もいつもと違う空気に少し緊張していた。そして、事前の打ち合わせの席で木村さんの第一声に私は虚を衝かれた。

「お水は、ペットボトルは止めてください。片手にマイクを持っていると、蓋が開けられませんので」

一瞬何の何を言っているのかよく判らなかつた。話を聞いてみると、ペットボトルの水を飲むには、一旦マイクを置いて両手を空けなければならぬ。その間、話が中断してしまう。木村さんの講演では、決められた時間の中で、一瞬の隙間もなくマシンガンのように話し続ける。中断はあつてはならない。

当日は私の他にゲスト二名も講演を行った。しかし、もし木村さんのパフォーマンスを講演と呼ぶなら、私も含めて他の三名の話は講演とは呼び難い。木村さんが、裂ばくの気合

で刀を振る演舞者だとすれば、私たちは縁側で四方山話をしていくがごとく弛緩した話し手であった。違いは、話の中心に關してではない。ただ、覚悟なしには、舞台上上がってマイクを手にしてはならないというプロ魂のようなものが、ひしひしと伝わってきた。この覚悟こそ、木村さんの講演の背後から聞こえる主調低音であると私は思った。

この「舞台の覚悟」は、何処からやってきて、何処で育まれてきたのか。

木村さんは知る人ぞ知る、上方漫才の最高峰「やすしきよし」のマネージャーだった人である。その後は、吉本興業の元常務として経営に辣腕をふるった。芸人にとっての舞台とは、まさにそこが主戦場、飯の種、腕の見せ所である。舞台から降りてしまえば、芸人はただのひとであり、あるいは「やっさん」のような異端児である。しかし、舞台上上がった瞬間に芸人は三百人の加担者と三百人の敵に囲まれて勝負をしなければならない。おそらくは、木村さんは、自らが生業としてきたこの演芸の世界の倫理を自らの体内に滲みこませて生きてきたのだ。

そういえば、テレビで見たことがあるが、名人上手が控え室、袖から舞台上上がるまでのあの張りつめた空気と同質のものが木村さんの身体から滲み出ている。私は、舞台の下にいる有能な経営者である木村さんを尊敬しているが、舞台上上がった勝負師木村政雄も好きである。いや、なによりその切り替えの見事さに惹かれるのである。

(ラジオデイズ・ラジोधューサー 平川克美)

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飘逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(年会費無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りませ!

<http://www.radiodays.jp>

〈対話・放談〉 人気メルマガでおなじみ「田中宇の国際ニュース解説」のエッセンスを毎月本人の肉声でお届けする『世界はこう読め!』

人気コラムニスト小田嶋隆氏が世相を斬る『ラフィカルトーク』、鈴木茂氏や林立夫氏など、さまざまなミュージシャンに話を伺う『Music Talk』が好評。現在、第一回を無料ダウンロード中です。さらに、慶應丸の内シテイクャンパス(慶應MCC)が開催している『タ学』のなから、各分野の第一線で活躍する研究者・経営者・文化人・ジャーナリスト等による講演を厳選してお届けしています。

〈文芸〉 作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた『声のエッセイ』コレクションが評判。また、『声の詩集』

シリーズからは、女優馬九せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の『水仙』も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三郎朗読による江戸弁で聞く落語調『ゴリ』『外套』『鼻』も発売。詩人の小池昌代さんのコラム『言問い小路』も好評連載中。

〈話芸〉 ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源二百二十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に筆を削る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の噺に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチャオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてください。まずは、試聴ボタンを。

オリンパスシンクする寄席

【日時】2月25日(水)午後6時45分開演(午後6時15分開場)
【場所】関交協ハーモニックホール(西新宿)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の斬を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が二席ずつ競演します！

三遊亭円丈

さんゆうてい えんじょう

昭和の大名、三遊亭圓生門下、現代の新作落語を率先して開拓した、芸界きっての電子系ネットワーカー。スティックなまでに究極の笑いを追求する姿にはカリスマとしての風格が漂う。狛犬研究家、中日ドラゴンズのファン、パソコンに精通しPCゲームの作家でもある！



三遊亭白鳥

さんゆうてい はくちょう

三遊亭円丈に入門。平成二年、二ツ目昇進「新海」。平成十三年、真打昇進、「白鳥」と改名。創作した落語は百本を超え、その類稀な創作力と表現力で、一躍新作落語の旗手となった革命児。作り手ならではの独特の解釈を盛り込んだ古典にも定評がある。



明烏い話

連載第22回

本田久作



『真田小僧』や『雛罌』といったこまっしやくれた子どもが出てくる斬の枕によく使われる小咄がある。子どもが刑務所ごっこをやるので着物が汚れてしょうがない。同じ遊びをしてもトシちゃんもちつとも汚れてないじゃないか、と母親が小言を言うと、だつてトシちゃんは終身懲役だから牢屋の中でじつとしていただけだ、おいらは三月のはした懲役だからモッコを担いで労役に出なくちゃいけないんだ、と子どもがこたえる。すると母親が、「そうかい、だつたら、おつかさんがみんなにそう言ってるから、お前も終身懲役にして貰いな」。

この小咄の中で、そんな遊びはするなと母親が子どもに注意すると、「だつて、そんなことしたらみんなにいじめられる」「なに言ってるんだよ、お前がガキ大将じゃないか」というくだりがある。斬家は皆が皆そう演るわけではないけれども、私はこのくだりが好きで、このやりとりがないと聞いていて何となく損をした気分になる。もちろんこのくだりがなくても、この小咄の面白さに変わりはない。それどころか私は常々小咄は短ければ短いほどよいと思ってるのだから、私の好みからすればこの会話はいい方という

ことになる。理屈の上ではそうなのだが、情としてはこの会話はぜひ演って欲しい。私は「お前がガキ大将じゃないか」と言う母親の台詞が好きなのだ。このたった一言で母親がどれほど息子を愛し、息子がガキ大将であることをどれほど誇りに思っているかがうつつと浮かび上がる。この台詞がなければこの斬はよくできたクールな小咄でしかないが、母親のこの一言を加えることによって、人情という調味料が振りかけられる。悪く言えば臭くなる。だが、その臭みはほとんど誰にも気づかれない程度のものだ。それぐらいの臭みは斬の中にあつた方がよいし、それがあっておかげで斬に深みが出てくる。

昔の音源には同じこの小咄の中でも「ガキ大将」のくだりはないから、おそらくはここ三、四十年ほどの間に誰かがこの台詞をもぐりこませたものと思われる。だがそれが誰であつたのかはどれほど探してもつきとめられないだろう。そこに古典落語における匿名性の素晴らしさがあり、だからこそ昨日今日拵えた新作落語はどうあつても古典には太刀打ちできないということになる。

落語作家の小佐田定雄は『たちきれ』から書けるかもしれないが、『道具屋』は書けない」という名言を吐いた。『道具屋』に限らず前座斬はあまりにも多くの人が手がけているため完成度が高くなりすぎて、細部を変更することすら難しい(たために『金明竹』のどこか一部分を変えて、元ネタよりも面白くできるかどうかやってみるとよい)。前座斬よりもさらに短い小咄ならばなおさらのことで、よほどの天才でなければそこにさらに何か一言つけ加えたり、差し引いたりすることは不可能だ。と思つていたのに、いつの間にかやら刑務所ごっこ小咄に「ガキ大将」の

一節が加えられている。おそらくこれをつけ加えた斬家は天才でもなんでもなかっただろう。彼自身したいしたこととは思わず、この一節をつけ足したはずだ。古典落語はさまざまな演者によつてしつこいほど繰り返して演じられているから、こういう瓢箪から駒のような奇跡が時々起きる。繰り返すが、こういうところだけはどうしても新作は古典にはかなわないのだ。

●ほんだ、まうさく

一九六〇年大阪府生、落語作家。「二〇〇二年の「仏の遊」が国立演芸場日本舞臺集作受賞以来、落語、漫才など新作日本関係の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家、主左受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本舞臺優秀作)、「徳の葬式」(按摩の夢)、「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀賞)など

私の讃大ばなし 貳拾壹

三遊亭白鳥

壹 『芝浜』

2つ目になり地元での凱旋落語会でどうしても大ネタがやりたくて勝手に覚えた。でも不安で師匠に「見てください」とお願いしてやり始める俺。しばらくして「やめる、2度とやるな」とお叱りを受ける。芝の浜に降りる前に止められました。

貳 『らくだ』

前座の頃ネタ帳に動物の名前が、「きつと貧乏なアラブの少年とラクダの心温まる、そう、フランダースの犬みたいな話に違いない」と思っていたのに……、ただの乱暴者の名前とは。そこで自分で作り直した。本物のラクダの死体が出てくる話をさ。

参 『替り目』

先代の志ん馬師匠は布くて有名だった。前座の頃、兄弟子があが急いで俺がネタ帳を書くことに。その時に志ん馬師匠がこのネタをや、わからないが聞くことができない。そこで書いたのが「おでん買い」。それを見た師匠が……、いまだに恐ろしくて夢に出ます。

「声」や「語」をタンロード！
今が旬の音声コンテンツ満載
<http://www.radiodays.jp>

齒に衣着せぬ発言で世相を斬る痛快トーク

●「田中宇の世界は、こう読め！」

●「小田嶋隆のグラフィカルトーク」

ミュージシャン・ロングインタビュー

●「Music Talk 鈴木茂の世界」



温もりと味のある声のエッセイ／新鮮な詩の物語り

●「詩人の心の原風景（谷川俊太郎）」

●「水仙」瀬戸内寂聴（朗読・有馬稲子）

●「詩人の愛 金子みすゞ、中原中也、村山槐多ほか（鳥丸せつ）／正津勉」



本邦初！世界初！江戸弁で聴く落語「ゴロリ」の魅力

●「外套」（I〜III）入船亭扇辰

●「鼻」（I・II）柳家三三



面白くて物凄、当世落語家の斬がい。ばい三遊亭円丈、昔昔亭桃太郎、五街道雲助、古今亭志ん五、柳家小ゑん、瀧川鯉昇、柳家喜多八、柳亭市馬、桂平治、柳家喬太郎、二遊亭白鳥、二遊亭遊雀、入船亭扇辰、林家彦いち、古今亭菊之丞……etc.

ラジオデイズサイトにようこそ！

※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。



こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗②



柳亭こみち

燕路宅での奇妙な風習。忘れ物をした人が靴のままそれを取りに家に入る。時間節約のためだ。前座時代、着物に白足袋で師匠宅にいた私にすると、掃除の手間が増え足袋も汚れる。なんとかならないか調べ、靴の上から履けるスリッパを見付けてプレゼントした。以来忘れ物をした人は皆その便利なスリッパを履くかと思っただけ、焦ると人はスリッパを履く時間すら惜しいのか。活用する人はおらず、靴箱の中で場所だけ占領し、存在すら忘れ去られていった。

これは2月号だが原稿を書いているのは正月某日。盆暮れ正月、そして燕路独演会にやって来るのがうちの両親。今年も参上した。

昨年足の手術をした父は靴の着脱に時間がかかる。師匠宅に上がるよう勧められたが「靴が脱げないの……」と玄関で尻込み。そこへ師匠の長男が「愛ちゃん（こみち本名）のくれたスリッパ！」と思いついた。かくして弟子の父親が土足（の上にスリッパ）で師匠宅に上がるといふミラクルが成し遂げられた。

師匠と私は黒紋付、母は家で一番いい着物、父はスーツで新年のご挨拶。こんな時はいつも母の独演会になる。日頃のどうでもいい事をべらべら。それを師匠もおかきさんもニコニコ聞いてくれる。父は土足でもみんなニコニコ。

今年もきつとい年になるような気がする。

※目下の者が目上の者に履物（足袋、ステテコ等）を差し上げることは失礼に当たりますが、このスリッパはそう習う以前のプレゼント。

●プロフィール

社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊、香妻流名取、香妻香巻。落語協会野球部・チームR所属。



味な脇役・話芸のきまり文句

連載第21回

病氣



松井高志

以前、「健康」というお題で「健康法」にまつわるきまり文句をご紹介したが、今回のお題は「病氣」である。「落語・講談と病」というテーマは、よく考えると、一冊の本ができてくると、その大きなネタなのであるが、ここまではあくまで「きまり文句」に注目して、話芸の中の「病」について述べる。落語では、よく恋わずらいに罹る人物が出てきて、その手の「病」を説明するとき、医師などが使う言い回しに、

（恋わずらいは）四百四病の外（ほか・そと）

としてある

などというのがある。

「四百四病」は「ありとあらゆる病」のこと。語源を詮索するのがお好きな読者のために書

いておくと、仏説では、人間の体は地・水・火・風の「四大」から成っており、これらが調和しないと、地大・水大・火大・風大から各百一病・合計四百四病が起るのだという。「恋わずらい」はこれらには含まれない、お医者様でも草津の湯でも治らない、というわけだ。また、

四百四病の病より貧ほご辛いものはない

などという言い回しが、講談の「寛永三馬術」（大島伯鶴）などにはある。これは窃盗の動機の説明である。貧困は世にあるあらゆる病氣より辛い、だから貧の盗みの出来心、悪いと知りつつ盗みを働いたのだろう、ということ。

日常生活でも時々耳にするのが、

風邪（感冒）は万病（諸病）の元

という健康ことわざ。講談などでは、高齢者が亡くなる時などには、「ふとした風邪の心地から床につき、これが次第に重くなって枕も上がらぬ大病になる」のがおきまりのコースである。こうくると次に、自らの死期が迫ったことを悟った病人は家族に遺言を伝えるものと相場がきまってくる。その遺言には、何かしら他人には聞かせたくない秘密がこめられているというの、またおきまりのパターンである。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に「人生に効く！ 話芸のきまり文句」平凡社新書、「フンドク【難読漢字自習帳】（パズリ）」「江戸に学ぶビジネスの極意」アスペクトなど。「話芸・きまり文句」辞典サイトは<http://wagelidion.ocooqigrlty.com/>

先月号に誤りがございました。

×「なき者は禽獣に近し」→「教育なき者は禽獣に近し」訂正しお詫び申し上げます。

オリンパスシンクろ

きわめつけ落語会

【会場】お江戸日本橋亭

【不声銭】2800円（前売2500円）

【時間】午後6時半開演（午後6時開場）

●3月18日④

春風亭小柳枝「井戸の茶碗」
八光亭春輔「旅の里扶持」
立川談四楼「浜野矩随」

※予約申込受付中！ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話011-3334-1113(ヨリ)、先着順です。

ラジオデイズ落語会

【会場】関交協ハーモニックホール（西新宿）

【不声銭】2800円（前売2500円）

【時間】午後7時開演（午後6時半開場）

●第15回 3月23日⑧

立川談笑独演会（ゲスト：米粒写経）

※予約申込受付中！ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話011-3334-1113(ヨリ)、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。
お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定（深夜のお客様）

2月3日 原さよ（朗読家）

10日 秋山進（インディペンデント・コン
トラクター協会理事長）

17日 喜多俊之（インダストリアルデザイナー）

24日 二宮清純（スポーツジャーナリスト）

睦月の落語会ひとつ

今年最初のオリンパスシンクろ寄席（第二十回・一月二十日）は、柳亭市馬、橋家文左衛門、両師匠が登場。大入り満員、酸欠が心配されるほどの盛況ぶりです。開口一番は、春風亭ぽぽさんで『転失気（てんしき）』。そして市馬師匠が陽気に『厄払い』。与太郎ご隠居に言われて大晦日の小遣い稼ぎに厄払いに出かける。口上が覚えきれず紙に書いてもらおうののだが……。マスケなように実は世渡り上手かもしれない与太郎が暗い世相をぶつ飛ばします。明るく爽やかなキャラNO1の師匠にピツタリな噺でした。続く文左衛門師匠は正月疲れで気だるく登場。「のめる」が口癖の男と「つまらねえ」が口癖の男が言葉封じの賭けをする『のめる』を。文左衛門師匠のぶつきらぼうなキャラが利いた噺で笑いを取りました。仲入り後は文左衛門師匠が再び登場。長屋の若い者が『寄合酒』で盛り上がるうとあの手この

手を持ち寄る物は？ とんちの効いた悪知恵続出で大笑い。大ネタが得意な師匠ですが、軽いネタもい味だしますねえ。トリはもちろん市馬師匠。冬の夜、火の用心の夜廻りのため町内の旦那衆が番屋に集合。寒いので二組に分けて廻ることに。一番組が戻り、二番組を送り出すと、持ち寄った酒やし鍋が出て大騒ぎ。そこへ見廻りの役人が現れる。ネタはご存知『二番煎じ』。歌が出るとそこはもう市馬師匠のひとり舞台、自慢の喉をたっぷり聞かせます。酒も歌も大好きな師匠がやると、こんなに楽しく明るい噺になるんですね。古典落語は何度聴いてもやっぱり面白い！ いつにも増して大満足の落語会でした。（ラジオデイズ寺和尚）



ichiba



bunzaemon

「声」と「語り」をダウンロード！

今が旬の音声コンテンツ満載 <http://www.radiodays.jp>

今最もブッキング困難な役者を揃えた特別対談。絶妙な話芸と目から鱗の文化対談をお届けします。

●戦後落語論

新作落語の旗手、そして教祖的存在である三遊亭円丈に、新進の落語作家本田久作がからむ。落語ファン待望の新作落語黎明期の真相話が炸裂。



三遊亭円丈

本田久作

●戦後詩人論

戦後作家の中心的存在であり鋭利な批評家でもある高橋源一郎が、生粋の詩人にして川端康成賞の小説家でもある小池昌代と現代詩について話し合う。



高橋源一郎

小池昌代

●戦後マンガ家論

脳生理学者であり京都漫画ミュージアム館長でもある養老孟司と小林秀雄賞受賞の現代思想家内田樹。マンガに一家言あるこのふたりが存分に語り合う。



養老孟司

内田樹

そのほか、面白くて物凄、朗読や落語がいっぱいです。ラジオデイズサイトによるこそ！
※ご購入や無料ダウンロードには会員登録（無料）が必要です。

オリンパスシンクろ寄席の「楽屋口（〇〇）」

シンクろ寄席オリジナルコンテンツ「楽屋口（〇〇）」が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R (シンクろ) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンクろ公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R (シンクろ) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクろ寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ！

シンクろ (Sync ★R) とは？

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を活用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

人気の少ない新宿御苑で目を引くのは野鳥たちの姿。冬の貴重な食料となる木々の実や種をついばんだり、羽を膨らませて群れていたり、いつもより大きな嘴をつくったり……。春が待ち遠しいのは皆同じなようです。

暖かい部屋にこもりがちなこの季節は、ぜひラジオデイズの「声」と「語り」に耳を傾け、伝え合うことの楽しさや豊かさ、声の温もりをじっくり味わってみてください。

